

2016年10月20日

## 博報財団 第10回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

## I. 研究成果概要

氏名	REDDY Sreedevi(レッドィ シュリーディーヴィ)
在住国名	インド
所属・役職	CMR 教育機関および CMR 大学 非常勤准教授
招聘回(招聘研究期間)	第10回 (2015年 9月 1日～2016年8月31日)
受入機関	人文科学研究所・京都大学
招聘研究テーマ	長谷川時雨の『輝ク』を中心に：一近代・平和・戦争協力
研究目的	本研究は、1930-40年代、日本のいわゆるモダニズム時代から戦争の時代にかけて、女性の立場から積極的に時代にかかわった長谷川時雨に関する総合研究である。その主張の要点は、自由主義・平和主義の立場から、女性・母性の擁護、権限を主張するもので、彼女はそれを「母性主義」と唱えた。しかし、「女人芸術」廃刊後、1933年「輝ク」を創刊すると、一転して女性を戦争協力へと駆り立てることに力を注いだ。女性・母性の主張がなぜ戦争肯定へと結びつくのか、本研究は、外国人研究者として長谷川時雨の事績を丹念に追いながら、それをとおして、あるいは手がかりにして実質的・具体的に日本研究を行うことを目指している。

## 研究概要：

『輝ク』は4枚のリーフレット(1933年(昭和8年)4月1日～1941年(昭和16年)10月【102号】発行者兼編集者長谷川ヤス(時雨)(1879年—1941年) 定価 五銭、一年間 五〇銭。推測では発行部数 2千～3千部とされている。

雑誌『女人芸術』と同様に『輝ク』を時雨の個性をぬきに語りえない。しかし『輝ク』の文章が表すように銃後運動・戦争協力は長谷川時雨の一人が背負うわけにはいかない。当時、進歩的と思われて来た多くのインテリ女性も戦争協力に走った。しかし、戦争協力を最初から固く断わりつづけたインテリ女性もいる。そこで活躍した多くの執筆者例えば、与謝野晶子、岡本かの子、平塚らいてう等の文章も戦争や天皇制度を称え、「帝国」の維持・支配するための戦争という暴力を支持する。また時雨に大東亜建設の思想はないという研究があるが、いくつかのところで、それをほのめかす時雨の文章がある。大東亜建設を通して平和の実現の夢が見られる。

『輝ク』を 前半 (1933年4月号—1937年7月号)と 後半 (1937年8月号—1941年10月号)と分けられる。『輝ク』の前半は、インターナショナル雰囲気誌面に全面的にあらわれるが、1937年10月の「皇軍慰問号」を組んだ時点から『輝ク』が大きくかわり、後半の雑誌は右傾化し、銃後運動の拠点になる。

『輝ク』1937年10月号の「皇軍慰問号」とその「慰問号」に対する反響もある。1938年の3月と5月は責任者である長谷川時雨の意思によって休号になる。マスメディアの厳しい取り締まりが始まり、婦人団体の国策への参加のために大きな団体「国民精神総動員中央連盟」のもとで吸収される。

「輝ク部隊」1939年7月10日 発会式がおこなわれ、発会式に陸軍情報部歩兵少佐の秋山邦彦 参加・挨拶ある。時雨は昔から官僚・軍部との交流があった。銃後運動に参加するかたわら、国際慈善交流にもかかわり、中国の留学生に文庫を寄贈するなど活動にもかかわる。

「母性」概念は、昭和の「15年戦争」に天皇制と結びつき、「母性」の自己犠牲や無限抱擁とされる。昔から日本には、庶民の間で根強く存在した観音信仰、庶民の信仰をすくいあげつつ、近代的な「自我」を真っ向から否定し、女に「無我」と「献身」を要求するものとなったと加納美紀代の論が指摘する。1938年(昭和13年)2月母子保護法、保険所法等々が打ち出される。戦争における「人的資源」確保のための政策の一環であったとしても、それは女性たちの長年の運動を吸収する形をとり、国の政策への女性参加だった。

「大東亜共栄建設」に関する時雨の思想もいくつかの作品・文章の中で明瞭に表示されている。

「四人の兵隊」には自分の家族から兵隊を出したことに、今まで肩身が狭かったのは、4人の兵隊を出すことによって、なくなった、とうれしく語っている。また『時代の娘』という作品のなかで非常事態の認識のありようを描写している。

まとめ: 当時長谷川時雨は『輝く部隊』を結成し、「知性的婦人層の国策への参加」の機を作り、慰問袋、遺族見舞いなどの活動の先頭に立っていた。女性の軍国思想への傾倒の経緯は、母性主義を基として、平和共存の実現をうたう大東亜共栄圏の思想に共鳴していた雑誌『輝く』においてほのめかされているといえる。女性たちは軍国思想の下に行われた活動に積極的に参加した。

母として女性は、精神の豊かさ愛、慈悲の心など男性が持たない資質を持つと一般的に考えられていた。母の犠牲と慈しみの心は世界を救う力を持っているとし、母心と呼んだ。当時の軍国主義はこの概念を巧みに利用したのである。平和の願望に基づく母性主義の強調が参加した女性の作品に頻繁に見られることができる。

展望:

今回は『輝く』を中心に分析をした。『海の銃後』『海の勇士慰問文集』を含めて分析をし、研究続けたいと思う。

論文にまとめたいと思っている。できれば出版もしたいと思っている。また長谷川時雨の研究も続かたわら、インド・日本文学の比較研究もしたいと思っている。